

## オランダ マーストリヒト便り(2)

加藤 林太郎

皆さん、覚えていらっしゃるでしょうか？以前にオランダ・マーストリヒトから留学生活のレポートを書かせていただいた加藤です。おかげさまで大きな事故も無く、無事日本に帰ってくることができました。あの原稿を書いたのは、留学が始まって2ヵ月ぐらいがたった頃でした。留学中に掲載された図書館報を送ってもらい、何回も読み返しました。そのたびに、自分が受けた第一印象と違って感じられること、また、変わらないものを確認することができました。今回はオランダ留学記の完結編ということで、オランダで実感したオランダ人気質というものを中心に、また個人的な考えを書かせていただきます。

オランダ人の学生とは、すっかり仲良くなりました。7月の終わりまで外大に留学していた人も何人かいるので、皆さんの中には友達になったという方もいらっしゃるでしょう。前回の原稿を書いた頃は、やはりお互い照れというか、何かどう接すればよいのかを探っているような感じでした。しかし、10ヵ月も一緒にいると照れも何もあったものではありません。もともと明るい人が多いといわれるオランダ人ですが、どうも学生の陽気さというのは驚くばかりです。一緒にサッカーをしたり(その度に「Ono!」と呼ばれましたが)、ライブにいったりしましたが、そのたびに感じることは、楽しいことを一生懸命する、という姿勢でした。陽気の一言では片づけられない、本気で楽しもうとする気持ちを彼らは常に持っているようです。そうでなければ、一言「ライブに行きたいなあ」と漏らした私のために、その日のうちにチケットを手配するなんてことはしないでしょう。そして、その気持ちは勉強に取り組んでいるときにも感じられました。日本で勉強する、というところか悲壮感というか、そういったものがつきまとい、なかなか楽しむということができません。しかし、彼らが勉強するその根本には、

自分が好きなことだから勉強しているという意識が常にあるようでした。もちろんテスト前などは勉強しすぎて頭を抱える学生もいましたが、その意識があるから辛いことも含めて楽しんでいるのだと思います。



その彼らの楽しむ力に何度も助けられました。彼らにしてみれば、周りの誰かが悩んだりしているのは楽しくないわけです。だから、自分の、自分たちの毎日を楽しむためなのでしょうが、とにかく困っているときには「大丈夫か？」と声をかけてくれます。時には強引に楽しい方へ引きずって行ってくれました。おかげで、辛いことが続いても、彼らといると笑うことができました。こちらが楽しいと、彼らは本当にうれしそうな顔をします。反面、辛そうな顔をしていると、親身になって話を聞いてくれます。一応、彼らの先生という立場もあるわけですから、あんまり深い話をするのもなあ、などと思っていましたが、気がつけばすっかり仲良くなっていました。しかし、今度は逆に、生徒と近づきすぎなんじゃないかという悩みが出てきました。そんなときも、一人の友達が「気にするなよ、授業中は先生、終わったら友達。それでいいよ。だから、授業中は厳しくやってよ」と言ってくれたことで救われ、また、より深い友達になれました。

日本語を教えるという体験ができたことはもちろん大きいのですが、オランダで私はそれと同じくらい大きな友達という財産も手にすることができました。そして、彼らの楽しもうとする力。これが私に、決して小さくない力を与えてくれたように思います。その力を持って、これからの学生生活、そしてその後も続く人生を、一生懸命楽しんでいきたいです。

かとう りんたろう

(2001年度 日本語学科派遣留学生)